而して慶政が此等の人を以て、印度（少くとも印度一帶の佛教國地方）の人と見たるは爭ふ可らざる事實にして、もとより支那以外の西南の地には印度を中心とせる佛教國の存せるを知りしに過ぎざるが如し、これその南蠻文字といひつゝ、尚ほ且つその記述によれば辨和尚卽ち明惠上人が印度の風を慕ふが故に之を送りしことを知り得るを以てなり。

（明治四十二年十月三十一日講演）

篇中慶政上人のことに關しては京都文科大學新村教授の教示によりて知り得たるもの多し、茲に記して謹んで感謝の意を表す。（四十三年三月二日記す）

四月上旬、恩師ムハメッド、バラカツーラー氏の來遊に接す、氏は印度の人、イラン語の造詣深く、目下東京外國語學校にて「ヒンドスタニ」語の教授を擔當せらる、則ちこの寫眞を示して教を請ひしに、第一の詩は波斯にては通俗のものにして、「シャー、ナーマ」（波斯の史詩にして古代よりサラセンの侵入に至る迄の諸英雄を謳へるものなり）の中にありと、よりて Atkinson 氏の英譯 The Sháh Námeh につきて之を索めしも、同書の抄譯なるが爲か未だ之を見出すを得ず、されど彼の國にて通俗なるものなりといへば、此詩を書きし所以も能く曉るを得べく、また、所謂南蠻人が波斯人なるべきことも疑がふべきに非るなり。（四月廿五日また記す）

（史學研究會講演集第三册、明治四十三年）

編者註　羽田博士は、昭和二十八年の早春、京都國立博物館で「慶政上人と南蠻文字」と題するほとんど最後の講演を行われた。編者が同館館長神田喜一郎博士から恩借したこの講演の速記に依れば、慶政上人の傳記に關する部分では、主として新村出博士や橋本進吉博士の研究、特に橋本博士の慶政上人傳考（大日本佛教全書、第一百十五册、遊方傳叢書第三所收）を、いわゆ

日本に傳はれる波斯文に就て